

# 学術フロンティア作業報告 - 大場磐雄資料編

荒井 裕介(國學院大學大学院特別研究生)

平成 11 年度から実施してきたプロジェクト國學院大學学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業(以下、フロンティア事業)も、本年度で最終年度を迎えた。フロンティア事業のなかで、大場磐雄資料を振り返り作業を通じての反省点と今後の展望を述べてみたい。

## 1. 大場磐雄資料とは?

大場氏は大正 14 (1925) 年に内務省神社局考証課嘱託となる。その後、國學院大學教授として広く全国を調査する傍ら、幅広い見識で当時としては貴重であった写真撮影により埋蔵文化財を含めた文化財の資料化を行なった。当時は国産の乾板が流通を始めた時期で写真(乾板)それ自体が非常に高価なものであった。そうした大正年間から第二次世界大戦の前後を通じ、昭和までの文化財の記録が、現在我々が取り扱う所謂“大場資料”である。

大場氏が収集した資料の貴重性は単なる古写真という枠に留まらない。その資料は遺跡・遺物といった埋蔵文化財をはじめとした考古資料や神社の御神体・御神宝といった神社関係資料、人物やスナップといったものがある。どれも、既に失われた文化財や景観を記録した極めて重要な情報を内包している。

## 2. 大場資料の概要

大場資料の具体的な数量は写真原版としてガラス乾板 3704 点・硝酸セルロースフィルム 574 点・35mm フィルム 322 点がある。このほか、他機関に貸し出していたため別置されていたガラス乾板約 850 点があり、一部は 14 年度事業報告で報告しているが、本格的な整理作業は来年度以降に着手する予定である。

また、それ以外に大場氏が自ら収集・調査した図面類や拓本、実測図、紙焼き写真、報告書等の書類、地図、カード、新聞等の切り抜き、絵葉書、書簡といった資料や寄贈を受けたものがあり、保管箱に納められている。総点数は箱数にして旧石器時代 1 箱、縄文時代 18 箱、弥生時代 13 箱、古墳時代 32 箱、歴史時代 53 箱、祭祀 42 箱、民俗 1 箱、外国 6 箱、ほかに十二支 3 箱を数える。各保管箱にはその内容毎に名称が付与されており、更に内容物を細分した分類袋が納められている。

ではこうした大場資料をフロンティア事業でどのような目的をもって展開していったのかを示してみたい。フロンティア事業が目的とするところは、プロジェクトの題目にも掲げているとおり「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」であり劣化画像をデジタル化することで画像の再生と保存・活用を促すといったものである。具体的な活用例は後に示すが、自治体などでは市史・町史の編纂や文化財の再検討に使用されているようである。

## 3. 資料の保管状況

保管に関しては現在、本学本館地下の“資料デジタル化研究室”で資料化作業と併行して保管されている。資料デジタル化研究室ではどのような(具体的)保管方法をとっているのかということだが、前提として行なわねばならないことは空調の管理である。特に湿気に気を付けねばならない。空調の管理はあくまで大前提だが、現在のところ我々が行なっている保管の実態としては棚分けをして個別

の管理をしている。乾板・硝酸セルロースフィルムは従来の箱(写真1・2)から取り出し、60枚を一箱に収め、箱の蓋にはシリカゲルを備えている(写真3)。35mmフィルムは専用のファイルに、その他の資料類は箱のまま保管している。

#### 4. 作業工程

ではこれら資料をどのような手順で資料化していくのか、その手順を大まかに説明していく。

##### 写真原板

まずクリーニングと整理番号割り振りを行なう。整理番号はガラス乾板・硝酸セルロースフィルムについては一連の番号を付している。次に、透過原稿スキャナで取り込み、画像の明るさや陰影の補正等を行ない保存する(写真4)。保存先はDVDライブラリを採用してきたが、現在ではさらに万全を期すために外付けハードディスク2個をバックアップとして利用している。

画像処理作業自体はこれに留まるが、併行して以前保管されていた様々な包み紙に残された“メモ書き”を読み起こすことで資料のテキストデータ化作業を行なっている(写真5)。本作業においては複数方向からのクロスチェックとして大場資料の確実性が増すため、単に“メモ書き”を読み起こすに留まらず、『楽石雑筆』『神道考古学論攷』『祭祀遺蹟』『神道考古学講座』といった大場氏の著作などから事実確認、撮影日時・場所・資料の特定といった補足作業も進めている。現在では、こうした画像のデジタルデータ化作業はほぼ終了しており、現在はテキストデータとの照合に移行している。テキストデータは、稲生典太郎氏・小出義治氏ら大場氏を直接知る方々の協力を得ながらノートに書き起こし、そこから項目を選択し、エクセルを用いてデジタルデータ化する。項目は、整理番号、グループ名、撮影日時、撮影場所、対象時代、箱書、撮影対象(封筒書)、撮影対象(現在)、原版種類、原版サイズ、文献、備考の12項目である。

なお、35mmフィルムについては、複写および“メモ書き”を読み起こしは終了しているが、それらのデジタルデータ化については未着手である。

##### 乾板類以外

乾板以外の大場資料は平成12年度事業報告以来、毎年目録を掲載しており本年度も同様の成果を公開するための作業を行なっている。

作業手順として、まず保管箱の時代・地域区分と内容物の相互確認を行ない、次に保管箱に納められた封筒を開封して、収められた資料を確認する(写真6・7)。資料は地名(都道府県)、遺跡名・所蔵者・日付等、資料の種別と資料の保存形式を確認し、エクセルを用いて台帳化していく(写真8)。15年度中に、旧石器時代から歴史時代前半までの目録化を終える予定である。

#### 5. 問題点

このような手順で資料化し保管していくに当たってはこれまでのシンポジウムなどでも常に様々な問題点が叫ばれてきた。そこで、実際に作業を通じて感じたことが幾つかあるのでその点について少し述べてみたい。

先述した前提条件には、絶えず管理する人間が必要となることを示している。現在、資料デジタル化研究室において乾板資料を4人で、乾板以外を2人で担当している。しかし、今後の作業展開を考えた場合に常時研究室に在駐して、資料を管理する人間の必要性を感じている。

単に保管・保存に終始しては生産的ではなく、資料は活用してこそ意味のあるものなのである。とするならば、既に資料の活用を具体的にし、着手しなければならない時期にきている。それで、ここ

までのフロンティア事業経過を概観したうえでどのような活用をしてきたのか説明しようと思う。

## 6. ここまでのフロンティア事業経過

文部省（現、文部科学省）高等教育局は平成9年から私立大学ハイテクリサーチセンター整備事業及び学術フロンティア推進事業を設けた。これを受けた國學院大学日本文化研究所では、学内にある画像資料のデジタル化と保存・再生活用するため、平成11（1999）年1月に平成11年度「ハイテクリサーチセンター整備事業及び学術フロンティア推進事業」の構想調書を提出した。

### 平成11年度

大場磐雄資料の電子情報化にむけ、資料デジタル化研究室を開設。デジタル化に関する試験的運用の準備段階。

### 平成12年度

事業報告で縄文時代篇目録・平出遺跡関連写真資料を公開。

### 平成13年度

縄文時代篇目録・平出遺跡関連写真資料をWebサイトで公開開始。

事業報告で弥生時代篇目録・登呂遺跡関連写真資料の公開。

### 平成14年度

弥生時代篇目録・登呂遺跡関連写真資料をWebサイトで公開開始。

事業報告で古墳時代篇目録、常陸鏡塚古墳・信濃浅間古墳関連資料の公開。

### 平成15年度

常陸鏡塚古墳・信濃浅間古墳関連の資料をWebサイトで公開開始。

これまでどおりのデジタル化作業を行なっているが年度内に画像データベースシステムの完成を念頭に置き行なっている。

冒頭でも述べたように本年度で、一応の終了を迎えるフロンティア事業であるが、現在の我々が示すことのできる“資料デジタル化の完成形”は、検索可能な画像データベースシステムである。このシステムとWebサイトでの成果公開を併せて、資料の活用の第一歩としたいと考えている。

## 7. 反響

先述の通り、最終年度での完成形態を待たずに、各年度の作業成果を事業報告書とWebサイトにおける作業成果として公開してきた。こうした情報化した資料の公開に伴い、これまでに研究機関や研究者個人の問い合わせをうけた。以下はその反響の一部である。

長野県塩尻市立平出博物館：大場磐雄ガラス乾板写真資料（パネル展示）

茨城県立歴史館：大場磐雄ガラス乾板写真資料（特別展）

千葉県史編纂委員会：大場磐雄ガラス乾板写真資料・関連資料（県史編纂事業）

長野県松本市教育委員会：大場磐雄ガラス乾板写真資料（浅間古墳群の再検討）

千葉県立上総博物館：資料化と整理に関して

## 8. 今後の展望

結局のところ、現場から現時点で見えてくる問題点として、長期間複数の人間により資料化の作業

が進められると、作業の全体像を把握できる人間が限られてしまうことがある。全体を把握できる人がいないということで今後資料の管理でも課題となると思われる。しかし、常駐管理者がいないとしても完全な第三者が作業と管理の全体像を把握可能なマニュアルを作成することも求められると思われる。我々が取り組んできた大場資料の作業から得た経験は、大場資料に留まらず古写真などの整理作業の取り扱いに共通した部分が多く、十分に活用できる。それだけに、作業マニュアルを先駆的な取り組みのモデル事業として公開していくことは、新たな活用方法をもたらすことに繋がるといえよう。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8